



ミハエル・ショッパ バリトン・リサイタル

MICHAEL SCHOPPER BARITON RECITAL

～バロック時代のリートとアリア～

～Lieder und Arien des europäischen Barock～

オルガン・チェンバロ/鈴木雅明

'88 11月17日(木)

岩手カトリックセンター 四ツ家教会

午後6時半開演

主催／盛岡バッハ・カンタータ・フェライン 協賛／岩手大学合唱団
後援／岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・NHK盛岡放送局・
岩手放送株・テレビ岩手株・エフエム岩手株

盛岡・バッハ・カンタータ・フェライン

代表 木村 吉彦

本日は、お忙しいなかようこそおいで下さいました。

内外の一流演奏家をお招きしてコンサートを催す企画が、私共の恒例となった感があります。本年は、9月に今仲幸雄氏(バリトン)を西ドイツよりお迎えして、既にここ四ツ家教会でリサイタルを行いました。そのわずか2ヵ月後に、またもや西ドイツからミハエル・ショッパ氏をお迎えしてこのような機会をもてますことは、私共にとりまして光栄の至りであります。ショッパ氏は、現在西ドイツを代表するバリトン歌手でありまして日本ではトン・コープマンの「メサイア」ソリストとしてもおなじみの方であります。このような、大歌手に接する機会を与えてくださった鈴木雅明氏に心より感謝すると同時に、本場の醍醐味に触れる喜びを皆様とともに満喫できることを心よりうれしく思います。

最後に、会場の貸与を快諾してくださった混声合唱団北声会の皆様と、協賛団体として会券販売等の御協力をいただきました岩手大学合唱団の皆さんに感謝いたしまして、ごあいさついたします。

リサイタルによせて ●

「至福の予感」

岩手大学助教授・声楽家

佐々木 正 利

“……unsere Aufnahme……Michael Schopper, Bass……”

在独時代、FM放送のアナウンスで何度この言葉を耳にしたことか。歌い手、聴き手としての関係ではあるが、ショッパ氏との初めての出会い、1970年アーノンクルの指揮するバッハのカンタータのレコードであった。新しくは、日本中を震撼とさせた、昨年のコープマンのメサイアのソリストとしての名演。NHKテレビでも放映されたから、御記憶の方も多からう。事実、代表的なバス歌手の手柄や名声を上げるよう求められるとしたら、頭に浮かぶのは紛れもなく、その印象的な姿と高い芸術性とは際立った、ミハエル・ショッパその人のイメージである。がっちりとした身体や迫力ある顔は大きくて表情が豊かだ。それだけではなく、実に柔軟に楽曲の綾を織り上げてしまう。繊細にして表現力に富んだ彼の歌声を聴いたすべての人々が、如何なる聴衆をも魅了してしまう芸術家が、目の前に居ることを改めて思い知るのである。

そのショッパ氏の名唱が盛岡で聴けるとは、何という幸せであろうか。しかも、彼の息使いの一つひとつが手に取るようにわかるであろう身近な距離で。この企画を、無理を承知で快くお引き受け下さった盛岡バッハ・カンタータ・フェラインと岩手大学合唱団には、心よりの感謝を申し上げなければならない。

今夜のプログラムは、イタリア、イギリス、ドイツの古典ものである。その中には声楽を学ぶ者なら誰でもが一度は歌う曲も含まれている。これら、一見簡単そうに見える曲は、その単純さが故に、本当のテクニックがないと歌にすることが難しい。はったりや虚飾でごまかせないからだ。それだけにショッパ氏の真骨頂が期待できる。バロックものを弾かせたら、今や世界有数の鍵盤奏者になられた鈴木雅明氏の奏でる調べにのせて、ショッパ氏の熱き歌声が場内いっばいに響きわたる至福の時を予感して我が胸、すでに高ぶっている。

〔イタリア Italien〕

ジュリオ・カッチーニ (1550頃-1618):『愛よ、何をするのか』

Giulio Caccini: Amor, ch'attendi

ジローラモ・フレスコバルディ (1583?-1643):『女よ、われら許しなき身』

Girolamo Frescobaldi: Donna, siam rei di morte

ジローラモ・フレスコバルディ:『もしそよ風がふけば』

Girolamo Frescobaldi: Se l'aura spira

ジュリオ・カッチーニ (1550頃-1618):『我が愛しのアマリリよ』

Giulio Caccini: Amarilli mia bella

〔イギリス England〕

ジョン・ダウラント (1562-1626):『目覚めよ、わが愛しの君』

John Dowland: Awake, sweet love

ジョン・ダウラント:『私は彼女の泣くのを見た』

John Dowland: I saw my lady weep

ジョン・ダウラント:『帰りきたれ、甘き愛が今や招く』

John Dowland: Come again! Sweet love doth now invite

ヘンリー・パーセル (1659-1695):『束の間の音楽』

Henry Purcell: Music for a while

〔ドイツ Deutschland〕

アンドレアス・ハマーシュミット (1611/12-1675):『日は隠れぬ』

Andreas Hammerschmidt: Die Sonn hat sich verkrochen

ヨハン・フィリップ・クリーガー (1649-1725):『愛の痛み』

Johann Philipp Krieger: Liebespein

アダム・クリーガー (1634-1666):『夕べの歌』

Adam Krieger: Abendlied

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685-1750): アンナ・マグダレーナの音楽帖より

『君、我と共にあらん』

Johann Sebastian Bach: Bist du bei mir

(Notenbüchlein der A.M.Bach)

ヨハン・セバスティアン・バッハ: シェメツリ歌曲集より

『来たれ、魂よ、この日こそ』

『幸いなるかな、魂の友よ』

『我至福の最期を望みぬ』

Johann Sebastian Bach: Kommt, Seelen, dieser Tag

Wie wohl ist mir, o Freund der Seelen

So wünsch ich mir zu guter Letzt

(aus dem Schemelli Gesangbuch)

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ (1714-1788):

『自然における神の栄光』

『受難の歌』

『ゲッセマネのイエス』

Carl Philipp Emanuel Bach: Die Ehre Gottes aus der Natur

Passionslied

Jesus in Gethsemane

ヨハン・セバスティアン・バッハ:『裏切り者なる愛よ』 BWV203

Johann Sebastian Bach: Amore traditore BWV 203

■ ミヒヤエル・ショツパー

リーゲンスブルクカテドラル聖歌隊のメンバーとして古典音楽を修得し、ミュンヘンの音楽アカデミーで教会音楽と声楽を学ぶ。ドイツの国際ラジオコンクール、ベルリン声楽コンクールに一位入賞。ミュンヘンの「フェリスモートル賞」及び「ババリアン州賞」を授与される。ラインハルト・ゲーベル（及びムジカ・アンティカ・ケルンの彼のメンバー）、トン・コープマン、フィリップ・ヘレヴェーグ、ニコラス・アーノンクール、グスタフ・レオンハルト及びルネ・ヤコブ（バロックオペラプロダクション）のレギュラー協演者として古典音楽界に大きな影響を及ぼす。ヨーロッパの主要バロック音楽祭（ユトレヒト、ブルージュ、インスブルック、フランクフルト、アルルその他）のすべてにしばしばゲスト出演する。多くのヨーロッパカルチャーセンターでオラトリオ、オペラに出演、又リサイタルを行う。北米、南米、スカンジナビア、イスラエル及び日本（1987年11月、トン・コープマンとアムステルダムバロックオーケストラ演奏のヘンデルのメサイヤに協演）に演奏旅行をする。ラジオ、テレビ放送及びDGG、EMI、TELDECのレコーディングも多数。アンドレアス・スタイヤーとのデュオでC.P.E.バッハからロマン派迄の歌とフォルテピアノの音楽の復興に大いに貢献している。

現在ヴェルツブルグ音楽院及びミュンヘンコンセルヴァトリの教授。又ヨーロッパ各国及びアメリカにて古典声楽及び室内楽の非常勤講師。

■ 鈴木雅明



神戸に生まれる。12才より教会のオルガニストを務め、東京芸術大学作曲科にて、故矢代秋雄に師事。卒業後、同大学大学院オルガン科に於いて、広野嗣雄に師事すると共に、古楽研究会に於いて、チェンバロを鍋島元子に学んだ。さらに1979年より、アムステルダム・スウェーリンク音楽院に進み、チェンバロをトン・コープマン、オルガンをピート・ケーに師事。同音楽院よりチェンバロとオルガン双方のソリスト・ディプロマを得た。その間、1980年には、ブルージュ国際チェンバロ・コンクール（通奏低音部門）において第2位（1位なし）、1982年には、同オルガン・コンクールに第3位入賞を果たした。西ドイツ・デュイスブルク国立音楽大学講師を経て、現在、松蔭女子学院大学（神戸）、及び、桐朋学園大学（東京）にて教鞭をとっている。松蔭女子学院大学に於いては、特別に音響設計されたチャペルとマルク・ガルニエ製作によるフランス・クラシックオルガンを用いて、積極的にコンサートシリーズを企画する他、全国各地でチェンバロ・オルガン奏者及び指揮者として演奏活動を行い、またオランダ・ドイツ・フランスを中心とするヨーロッパ各地でも、しばしばコンサート・ツアーを行っている。とくに、'86のオランダ・ハーレムのリサイタルでは、「オルガンを知りつくした生きあふれる雄大な演奏…」と紙上で絶賛された。プロテスタント教会音楽の研究も手がけ、特にカルヴァンの詩篇歌の普及に努めている。日本キリスト改革派東京恩寵教会オルガニスト。